

基調講演

「貧困の中の子ども」を取材、報道して～子どもの希望を考える～

下野新聞社 編集局社会部部長代理 山崎一洋 氏

◆共感性を重視、全8章60回の連載

今日の「子どもの貧困は誰のせい？」というテーマは、結構、挑発的だと感じます。「子どもの貧困は親の責任」という「自己責任論」が根強い一方、「子どものせいじゃない」「親を責めるだけで何も変わらない」という受け止め方が浸透しつつあります。それでも、「子どもの貧困は、自分自身も含めた社会全体の問題」と捉えられているかを考えると、私自身も含め、そこまでの認識に立ちきれないというのが現実ではないでしょうか。そこに問題の難しさの一つがあると思います。

報道に当たって重視したのは、「共感性を持って読者に伝える」ということ。人はものごとくに共感すると行動を起こすと思います。世論に訴えるメディアとして、読者にどう共感してもらえるかについて、いつも考えながら仕事をしなければいけないと肝に銘じています。

この連載は全部で60回。記者3人の取材班のほか、私が統括する立場のデスクとして関わり、2014年の元日から6月まで半年間かけて取り組みました。

こちらが元日の1面の紙面に掲載したプロローグです。この写真のじゃれ合っているように見える兄と妹の2人も、困窮家庭で暮らし、大変な思いをしていました。

プロローグでは、象徴的なケースを少しずつ取り上げています。一つは高校に通っていない16歳の男の子。父子家庭でお父さんの収入が不安定であることから、収入を得ようと工事現場などのアルバイトとして働いていました。支援者から「将来の夢は何？」と尋ねられ、「車」と答えます。さらに「そうじゃなくて、将来の夢は何？」と問われても、答えは「車」です。支援者は、「男の子にとって、夢とは、それはお金を稼ぐ手段としか捉えていない」と見えたそうです。

もう一つは、じゃれ合っているように見える兄と妹の話です。兄は、力はあるのに、中学校まで特別支援学級で授業を受けており、妹は小学校に入ってもおむつをしていました。生活保護を受けるお母さんは家事や金銭管理が苦手。自宅のアパートは、いわゆるごみ屋敷のような状態で、生活の環境が整わなかったことからそうなっているのだろうと思われ

ます。このケースは後ほど、詳しくお話しします。

さらに、30歳を過ぎて結婚なさっている女性も取り上げています。児童養護施設で育ったこの女性は、結婚生活とか「普通の奥さん」に憧れて、一生懸命、家事をします。しかし、施設で育ち、一般的な家庭を知らなかったことから、「普通の奥さん」がどういうものかわからないことに気づきます。これも相対的貧困と言われるものの一つだと思います。

正直に言いますと、このときは取材が始まって数カ月、私たちは、子どもの貧困は好ましくないと感じはしても、何をどうしていいかは見えていませんでした。プロローグは、読者に対して「子どもの未来について読者のみなさんも一緒に考えてくれませんか」というメッセージを込めて、見出しをつけています。

取材して、子どもの未来について考え、また取材する。そして、さらに考え、取材する。そんな繰り返しでした。プロローグに始まり、第1章から最終章までの全8章の構成になりました。

まず第1章の「相対的貧困とは」。言葉は時折、耳にすることはあっても、実際にどういふことなのか、実はよくわからない。実例を取り上げて読み解きました。

相対的貧困を取材していくと、子どもたちの困難は「お金がない」ということだけではなく、意欲が損なわれていくことも大きな問題らしい、とわかってきました。意欲を持つこと、それによって育っていけること、生きていくことの大切さを描き出したのが第2章「育つこと・生きること」でした。

第3章は、「ただの借金」との批判もある奨学金の問題をスポット的に取り上げました。

第2章からのつながりで考えます。意欲が損なわれると、成長する、育つことにも支障が出かねない。では、そのときに何が必要なのか、どういう応援が必要なのか。バックアップによってどう変わるのか。そういうことを取り上げたのが第4章「重なる困難 差し伸べる手」です。

第4章の取材を通じて、いくつもの困難に直面していても、適切な支援が届けば、事態が改善していくことが見えてきました。しかし、貧困の中に置かれた子どもや親は自らの殻に閉じこもることが多く、端から見つけることが難しい。まして支援につなげることはさらに難しいと言われることがわかりました。そこで、第5章は「見つける・つなぐ」と題して、現状と課題、事態打開の糸口を考えました。

そもそも、なぜ困窮状態に陥るか、その構造を見極めようとしたのが第6章「母子家庭 就労8割 貧困5割」です。一定の支援が届いている生活保護受給世帯に比べ、ワーキング

プア世帯への支援は極めて薄い、という現実を描きました。

でも、どうすればいいのか。潤沢な原資をもって、経済的な支援をできればいいですが、国の財政も逼迫している。何か方策はないか。その答えを探そうと、イギリスのケースを取材に行きました。第7章「英国の挑戦」です。イギリスを選んだのは、過去に大きな経済成長があって、現在は財政問題も抱えている、という構図が日本と比較的似ていたためでした。最終章として、取材、報道を総括し、取材班なりの五つの提言をまとめました。提言は多くの方々に議論のたたき台として活用してもらえれば、と考えています。

◆貧困の現場

まず、どんな現実があるのだろうかを見ていきたいと思います。見出しは「父親代わりの14歳 兄妹3人の夜 募る不安」。第2章「育つこと・生きること」で出てくるケースです。

困窮が子どもたちをどう不安にさせ、どう意欲を奪って、さらには育つという力の根源である意欲が失われていくという状況を描いています。育ったり生きていったりすることは、当たり前のことに感じます。でも、その当たり前のことがとても難しいことになってしまう。そういう現実を伝えています。

お母さんと子ども3人の母子家庭のお話でした。当時、14歳で中学2年だった一番上のお兄ちゃんの祐汰君、小学生の11歳の弟、8歳の妹がいます。実際に取材したとき、お母さんは体を壊して休んでいたのも、傷病手当の8万円で暮らしていました。かつて昼間は薬の卸の会社、その後は深夜まで運転手をしていました。いずれも非正規で、その過酷な労働で体を壊していました。

そのダブルワークを始めるきっかけは2011年、祐汰君が中学生になることでした。「大きくなったね。本当にお兄ちゃんだね」と目を細めるというのが一般的なイメージです。でも、喜べない。なぜなら、中学校に入るのですから、制服が必要です。体操着も、かばんも必要です。自転車も必要になるかもしれません。買いそろえるのに10万円くらいかかるのに、それが捻出できない。

お兄ちゃんが中学生になるのはわかっているのだから、貯めておけばいいじゃないかと思うかもしれませんが。しかし、日々、ぎりぎりの生活で、貯めるなんてできませんでした。就学援助など公的な支援制度もありますが、ある程度の期間をもって準備しなければいけない。日々追われている中、準備は難しいことでした。ダブルワークは、お母さんを心身

ともに追い詰めていきました。

お母さんが運転の仕事から帰ってくるのは夜 12 時過ぎ。その間、祐汰君は弟、妹の面倒を見ます。祐汰君はご飯をつくったり、お風呂に入れたり、寝かしつける。特に妹は「お母さんを待っている」となかなか寝ようとしませんでした。お兄ちゃんとして気丈に振る舞う祐汰君もまだ 14 歳の子どもです。本当は不安なわけです。弟、妹が熱を出したらどうしよう。ずっと泣き続けたらどうしよう。そんな思いにかられ、寂しいし、心細い。でも、それでも「お金が厳しい」というのは何となくわかっていますから、わがままも言えませんでした。

弟と妹が寝静まって、お兄ちゃんは 1 人でお母さんを待ちます。バスケットボールの部活をしていて、朝練が時々ある。夜更かしすると起きるのがつらくなるのが分かっているけど、お母さんが帰ってくるのを確認しないと眠れない。部屋が静かになると息苦しく感じるので、テレビはずっとつけっぱなしでした。そんな状況ですから、勉強をやろうといってもなかなかできない。成績は下がっていきます。あせり、また勉強が手につかない。悪循環でした。

はたから想像すると、お母さんは大変な思いで働いているのだから、子どもたちもその背中を見て、勉強をすればいいんじゃないか、と思いがちです。でも、何せ子どもですから、無理ですよ。

そんな状況になると、祐汰君の気持ちに変化が生じます。誕生日プレゼントもないし、部活で使うバッシュも穴が開いたままです。でも、それもだんだん欲しいと思わなくなり、何かを「買って」「これをして」と言わなくなってしまう。これも子どもらしくない。納得しているわけではなく、もうそういうふうにはかできなくなってしまうということです。

祐汰君に受験が近づいてきます。友達と話していると、私立高校はたくさんお金がかかるらしいという話も耳にし、「私立は無理だ」と思いだします。「ゲームのエンジニアになりたい」という夢がありましたが、それも「無理かな」と思う。成績が下がっていく自分の現実と照らし、「そもそも高校に行けるのか」という不安を抱えるようになりました。

そんなとき、お母さんが、ボランティアが運営し 1 回 200 円の学習支援があることを聞いてきました。祐汰君は以前、1 回だけ「塾に行きたい」とお母さんに言ったことがありましたが、「経済的に無理」と言われていたので、学習支援の場には、即答で「行く」と決めました。

それまでも先生や友達に勉強を教えてもらっていました。教えてもらおうと何となくわかったような気がしても、復習しようとする、やはりわからなくなってしまう。でも、学習支援に行くと、自分のペースで教えてもらえてわかる。「わかる」感覚を実感でき、やる気がまた出てくる。すると意欲を少しずつ取り戻し、県立高校に合格できました。

もし学習支援がなかったら、どうなっていたのだろうか考えると、非常に怖い。貧困の連鎖に陥っていくこともあり得たのだと感じます。

◆基本的な生活習慣すら…

困窮に端を発し、基本的な生活習慣さえ身につかないというケースをお話しします。先ほど少しお話しした生活保護を受ける母子家庭のおむつの子やそのお兄ちゃんのことです。生活保護を受けている母子家庭でした。

お母さんは家事が苦手で、アパートの部屋は外にまでものが飛び出しているような状況があり、ごみ屋敷状態。金銭管理も得意ではなく、水道代も払っていないので、水が流れず、トイレが使えません。いわば「トイレがない家」です。そうすると、トイレに座って用を足すという習慣が身につかず、小学校になってもおむつが取れませんでした。

お兄ちゃんは近くの公園に行って済ませたり、水を飲みたくなったら公園の水を飲んだりして、子どもたちは何とかしてしのいでいました。食事でも満足に食べられない。そんな環境に置かれると、「学校なんてどうでもいい。行かなくてもいいじゃないの。行って何になるの」と思い始めますが、それでも行くのです。なぜだと思いませんか。給食があるからです。そこでお腹をいっぱいにして、次の日のお昼まで食べない、というか、食べられない状況もありました。

お兄ちゃんは中学校の特別支援学級で授業を受けていました。支援者は「普通に能力のある子」と感じ取っていましたが、家庭環境から勉強する習慣が生まれませんでした。ですから自分が高校受験をすることも考えない。衣食住すら脅かされるような状況があると、学習習慣など身につかず、不登校になったり、いじめに遭ったりというようなこともあります。そういう状況にさらされればさらされるほど、困難さは大きくなっていくということだと思います。

◆子どもの貧困は誰のせい？

こんな家庭の話を知ると、「お母さんがしっかりすればいい。自業自得ではないのか」と

思っていませんか。生活保護を受けずに済むように、働けばいいじゃないか。子どもがいるのだから。部屋も整理整頓して勉強できるような環境をつくれればいいじゃないかと
思っていませんか。その側面もあるかもしれませんが、そればかり言っても始まりません。

今日のテーマで「子どもの貧困は誰のせい？」ですが、少なくとも子どものせいではないですね。親のせいというのは、どうでしょうか。

記者の一人がイギリスに取材に行った時のことです。子どもの貧困対策が進んでいるイギリスで、民間支援団体のあるスタッフがこう言いました。「親のせいだとするならば、イギリスの子どもの貧困率がノルウェーとか北欧などより高いのは、イギリスの親が悪いからということになる」。問題は社会の側にあると、気づかされました。

先ほどのお母さんは、自らも生活保護受給家庭で育った人です。NPOの支援者の方は「ずっと責められるような気持ちで生きてきたのではないか」と言いました。たとえば、子どもが学校を休みがちになると、学校は「ちゃんと学校に来させてください」と言います。提出物を持ってこなければ、「ちゃんと持たせてくださいね」と言うでしょう。家賃や公共料金が滞れば、「払ってください。困ります」と責められ、督促が来る。部屋がごみ屋敷になっていると、周囲は「迷惑だから片付けてください」と求めるでしょう。別に周囲が何か悪いことをしているわけではないと思います。でも、言われた本人はどう受け止めるか。

自分も生活保護家庭で育っているということは、小さいころからそういう光景を見てきたのかもしれない。そうすると人と接触してSOSを出すよりも、内にこもるようになったのでしょうか。

◆アウトリーチと居場所

そうなってくると支援は難しい。アウトリーチしようとしても、会ってもらえなければ、詳しい状況すらわからない。支援者は一緒に何かをして、少しでもお母さんが動き出せるように背中を押そうと動き始めますが、訪ねて行っても出てきてもらえない。携帯電話に電話をしても出てくれず、なかなかお母さんと接触できません。

そこで支援者は「接触できず、家に入れてもらえないのなら、子どもたちに来てもらおう」と、食事や洗濯、入浴、勉強をする衣食住を支援する居場所をつくりました。子どもたちが喜びそうなクリスマスパーティー、門松づくりなどあの手この手を考え、「ここに来て」と声を掛けますが、それでも来てくれません。食べ物を絡め、「たこ焼きパーティーを

やるから来て」と誘うと、やっと子どもたちが来てくれました。声を掛け始めてから1年だったそうです。

いったん足を運ぶと、妹は、「次はいつ？ 何をやるの？」と興味を示します。濃厚な支援が始まりました。

支援では、早朝、NPOのスタッフが妹を家に迎えに行きます。小学校に入ってもまだオムツをしていましたから、まず居場所に連れて行き、お尻をきれいにして学校に連れて行きます。放課後も居場所に入浴、着ている服の洗濯、学習支援を受けた勉強をし、晩御飯を食べて家に送っていく。そうした支援を夏休みも含め半年間続け、妹はようやく自分で用を足せるようになりました。

妹が支援を受けることで、お兄ちゃんにもいいことがありました。お兄ちゃんは、行き渋る妹を小学校に送り届けてから自分は、別の場所の中学校に行っていました。送り届けなくてよくなると、お兄ちゃんにも自分のリズムができてきました。特別支援学級で授業を受けていましたが、居場所の学習支援で勉強を教えてもらう。後から聞いた話ですが、お兄ちゃんは「成績はビリ。自分はバカだと思っていた」と話していました。だんだん成績は持ち直し、教科によっては学年で半分くらいのところまで上がりました。

子どもたちを誘い出そうとするのに併せて、支援者は散らかっているアパートの部屋の周りを掃除していました。お母さんはずっと会うのを拒み続けていたのですが、あるときドアが開いて、「これもお願いします」とごみ袋がスッと出されました。お母さんも少しずつ支援者に心を開くようになり、ようやく自宅アパートに入れてくれるようになりました。衣服などが積み重なって床は見え、部屋の中に靴を脱がないで入るような状態。そういうところも支援者の人たちが何日かかけて片付けました。

かつて高校受験をすることさえ考えなかったお兄ちゃんは、県立高校に合格しました。もう高校3年生で、就職が決まったということです。

◆支援につながる好循環

居場所など支援する場所があり、効果が上げられると、ある好循環を生むということも取材で見えました。支援していいほうに向かせられる場所があると、積極的に貧困の中にいる子どもを見つけるようになることです。

取材の中で、こんなことを言っている人がいたそうです。この子は様子がおかしい。虐待や貧困状態にあるのではないか。探してみると、子どもが困っている状況を見つけたが、

どうすればいいかわからない。だからもう1回ふたをした。

小学校の元校長先生は、学校で「この子は貧困の中に置かれたり、虐待を受けていたりするかもしれない」と思っても、それをなかなか外に出せない心理が働いたそうです。「適切に対応できないのは学校の恥との感覚もある」と話しました。支援の好循環があれば、状況は変わるはずですが、こうした流れはとても大事なことと思っています。

◆支援ターゲットはワーキングプア

そもそも何で困窮状態になってしまうのか。いま一番応援しなければいけないのに、支援が手薄なのはワーキングプアの人たちと思っています。

40代のお母さんと小学2年生の娘で公営住宅に住む母子家庭のケースです。夫のDVで離婚し、貯えもなく車も持っていないという状況でした。ですから仕事は自転車で通える範囲で探すのでなかなか選べず、パートで働いても月の稼ぎは7万円から10万円くらい。しっかり働いて収入を得ようとする、正規雇用を希望するわけですが、40代以上の女性にとって環境は「厳寒」です。正社員は難しく、仕事を選べない。いま有効求人倍率は改善していると言うけれども、少なくともそういう層に正社員の口がいくという回復ではありません。時給で働くことが多いわけですが、もちろん休日もありますし、母子家庭だと、子どもの学校のことで休まなければいけないことも出てくる。そこで収入が減ることにもなってしまいます。

ではどうすればいいのか。専門家の先生の話ですが、日本の困窮者支援は厳格に二分されているそうです。生活保護はそれなりにお金が出る一方、それ以外のワーキングには、ひとり親家庭向けの児童扶養手当があるくらいで支援が極めて手薄です。取材班で議論した結果、やはり現金給付が必要ではないか、という考えにたどり着きました。「お金があるだけではだめだが、お金がないと始まらない」という考え方です。現金給付というと「ばらまき」という批判も出やすいですが、現金給付でしかできないことがあると思います。たとえば子どもの貧困対策だからといって、子どもへのものとかサービスを提供したところで、家賃の滞納は止められません。さらに、部活の道具を買うのにも、ものなどの給付といっても現実的ではないでしょう。

「そんなことをしたら親がパチンコで使ってしまう」という見方も方もあります。もし、そうだとすれば、お金を渡すことがいけないのではなく、プラスアルファの支援が足りないのだと思います。

生活保護をめぐる課題も感じました。これも専門家の先生がおっしゃったことですが、「不正受給はけしからん」と世間からたたかれ、それによって何となくムードとして生活保護自体が受けにくいというムードが醸成されてしまいます。先ほど、話した40代のお母さんも、生活に関する照会を親族にまでされることを敬遠したこともあり、生活保護という選択肢をとれずにいました。闇雲なバッシングよりも、生活保護を正しく活用し、生活を立て直すことを重視すべきなのだと思います。生活保護を受けている方にお金だけ渡せばいいだけではなく、合わせて生活面での支援も重要です。

別の問題もあります。ある生活保護を受けるお母さんは働き始めると、保護費は収入に反比例して減り、家計に入ってくるお金自体は増えませんでした。「だったら働かなくてもいいのでは」と打ち明けました。ある一定水準までは働けば収入が増えるという仕組みをつくり、生活保護から外に出ていくための背中を押す。そういう考え方も必要でしょう。

◆わたしたちがすべきこと、できること

子どもの貧困問題に対して私たちは何ができるのでしょうか。一つは、問題を知ることだと思います。貧困が連鎖すると、その人は生活保護などの社会的コストがかかる大人になってしまう半面、自立できる人が育つと、その人は納税者になります。子どもたちが育つということは、日本のためにもなり、何より本人が幸せでしょう。

いま給付型奨学金を増やすという議論が活発です。それ自体を聞けば誰も反対しません。でも、「皆さんが税金の負担をもうちょっとだけ増やしてください。そうしたらこれだけの子が大学に行けるようになります」と言われたら、考えてしまう部分はありませんか。負担増という痛みを覚悟することも避けて通れないのだと思います。

報道する中で、読者の皆さんから「子どもの貧困に対して何かしたいが、どうすればいいか」と寄せられました。身近なところで直接的にできることを考えると、ある意味、一番簡単なのは寄付としてお金を出すことでしょう。社会福祉協議会などはもちろん、子どもを支援するNPO、奨学金の運営団体もあります。居場所や学習支援の場でボランティアとしてお手伝いをするという活動もありますね。

連載は書籍（「貧困の中の子ども」ポプラ新書）になっています。ご関心がありましたら、手にとっていただけたらと思っています。ご清聴ありがとうございました。